

源氏物語の伝来と享受の研究

専修大学大学院文学研究科

日本語日本文学専攻

菅原 郁子

論文要旨

本論文では、『源氏物語』がどのように伝わり、受け継がれ、時代によって変容を見せてきたか、ということについて究明する。

藤原定家の日記『明月記』嘉禄元年（1225）2月16日条によれば、「無証本之間、尋求所所、雖見合諸本、猶狼藉未散不審」と、各所に写本を求めて諸本を見合わせたが、乱れた箇所の不審が拭えないと記されている。つまり、鎌倉時代に定家が『源氏物語』の証本を作成する際、もうすでに『源氏物語』の本文はかなり混沌としていたことが窺える。『源氏物語』の写本は、定家作成の青表紙本、河内守であった源光行・親行の親子によって作成された河内本、それ以外の別本など、約250本程度が現在まで伝来している。平安時代に書き写された『源氏物語』は現存しない。ゆえに、『源氏物語』の原典に少しでも近づくためには、鎌倉・室町・江戸時代に『源氏物語』がどのように伝来、享受されたかを一つ一つ探っていくことが肝要であると考えられる。

第一篇では「専修大学図書館所蔵資料」と題して、専修大学図書館所蔵の貴重典籍から、鎌倉・室町・江戸時代における本文・古筆切・抜書等のさまざまな形態の『源氏物語』について論じた。冷泉為秀は定家の曾孫であり、今川了俊の和歌の師匠でもある。専修大学図書館所蔵伝為秀筆『源氏物語』桐壺巻は、定家本を藤原為経が借覧した為経本があり、それを為秀が書写したものと考えられる。専修大学図書館所蔵伝藤原為家筆『源氏物語』古筆切（総角巻）は、定家の子である為家筆と伝えられる、古筆手鑑『墨跡彙考』の一葉である。異体字の仮名表記や本文を検討すると、鎌倉時代に書写された可能性を持つ、米国議会図書館所蔵本、首書源氏、絵入源氏、湖月抄等に近い本文である。専修大学図書館菊亭文庫蔵『源氏物語抜書』六帖は『源氏物語』の古注積書である『万水一露』に近い本文を、一帖に一項目という原則に基づいて、袋綴本の丁の表に本文を書き抜き、丁の裏は

白紙という体裁を取る。つまり、琵琶を家職とする菊亭家周辺の画帖作成における試作課程（詞書と絵）を示す、草稿本の可能性が考えられるのである。

第二篇では「本文の伝来と享受」と題して、室町期に成立したとされる『源氏物語』古写本について論じた。歌僧正徹は定家を崇拜し、今川了俊と共に冷泉家に出入りしていた。正徹本を照査してみると、正徹自筆本から派生した嘉吉三年本・文安三年本・長禄三年本の転写本が存在していたことがわかる。大内氏・毛利氏の防長の奉公人として活躍した大庭賢兼は桓武平氏・鎌倉氏の庶流であり、剃髪して宗分とも称した。賢兼の周辺には、宗祇や正広ら連歌師たちと交流した大内政弘による良質な『源氏物語』が存在し、さまざまな写本との校合跡が見える。五辻諸仲は五辻家の中興の祖であり、三条西実隆や公条と交流を持った人物である。米国議会図書館所蔵『源氏物語』は、折紙の近似や独自の共通異文から、昭和初期に国文学者・渡部榮氏旧蔵の従一位麗子本（転写本）と対校された五辻諸仲本ではないかと結論づけた。

第三篇は「野々口立圃と『源氏物語』」と題して、俳諧・俳画の両面に秀でた野々口立圃の『源氏物語』享受について論じた。立圃は猪苗代兼与に連歌を、狩野探幽に絵を、烏丸光広に和歌を、青蓮院宮尊朝法親王に書を、松永貞徳に俳諧を学んだと言われている。専修大学図書館所蔵『源氏物語画帖』の詞書は大島本や三条西家本に近い青表紙本であり、制作は1670年前後と推定される。堂上公家の詞書と地下人立圃の挿絵をモチーフとした『源氏物語画帖』が制作された背景には、鳳林承章の文化サロンの存在がある。後水尾院の厚遇を得た承章サロンの文化ネットワークにより、画帖は成立した可能性が考えられるのである。立圃の代表作であり、『源氏物語』の梗概書でもある『十帖源氏』からは、草画を極めた独創的な立圃の挿絵と、歌物語に留まらない俳諧の付合を選び取り、うまく繋ぎ合わせたかのような本文構造が浮かび上がってくるのである。

以上、鎌倉・室町・江戸時代において、『源氏物語』に関わる写本・注釈書・抜書・古筆切・版本・絵画等について考察した。そこからは、「定家—為家—為相—為秀—了俊—正徹—宗祇—実隆—公条—実枝—幽齋—貞徳—立圃」という青表紙本系統の源氏学派の伝流と享受が見えてくる。現存する『源氏物語』の写本・注釈・絵画資料等の中には、十分に位置づけがされていないものが極めて多く存在する。調査・究明されていないものを一つ一つ調べ、位置づけることが『源氏物語』の伝来史や享受史において重要であると考え。本論文はその一つの試みをしたものである。